

# メディア論の観点を加えて文学教材を扱う授業の開発

## —魯迅「故郷」を題材に—

遠藤 茜

千葉大学大学院教育学研究科修士課程

中学校3年生の国語科における魯迅「故郷」の指導の際に生じる問題点として、教材の歴史的背景の理解が難解であることが挙げられる。また、翻訳文学であることの指導は通常行われることは考えにくい。

このような指導法では、作品の読解がテキストの表層をなぞる作業にとどまることが懸念される。本論では、「故郷」という作品を1つのメディアとして理解させることの必要性を主張する。先述した歴史的背景の理解不足や、翻訳の違いを授業に組み入れることで、「故郷」が時代や環境の変化につれ、多様な読者を対象としてどのように作り変えられてきたのかを理解させる。

本研究では、メディア論の観点を組み入れた授業を構成し2校で実践授業を行った。その成果と課題の考察までを研究内容とする。<sup>1</sup>

キーワード：故郷、メディア論、魯迅、バッキンガム、文学教育

### 1. 問題の所在

#### 1.1. 国語教科書における魯迅「故郷」

魯迅「故郷」<sup>2</sup>は中学校3年の国語科における読み物教材として、1959年に初めて1社に採択され、1972年には日本書籍以外の5社の教科書会社で採択された。そして、1975年版からは全社に採択されている。現在では、国語教科書の出版を停止した日本書籍を除く国語教科書会社5社全てにおいて、教材として採用されている。

また、「故郷」の翻訳で出版されたものは1932年の佐藤春夫訳を基本とし、竹内好、増田渉、丸山昇等11人以上<sup>3</sup>の訳が存在するが、現在、教科書で用いられているものは全て竹内好による翻訳であり、『魯迅文集第一巻』（筑摩書房、1976年）を出典としている。

では、「故郷」からは何を学ばせることになっているのだろうか。平成28年度版の各教科書会社による指導計画案の例の中で示される魯迅「故郷」における学習の目標を以下に引用する。

- ・東京書籍…①場面の展開と人間関係の変化を捉えて、作品を読み深める、②作品を読んで、社会の中で生きる人間について考え、自分の意見を持つ

つ

- ・三省堂…①場面や登場人物の設定の仕方を捉え、内容の理解に役立てる、②「私」と「閩土」の言動を根拠としながら、人間と社会について自分の考えをもつ
- ・光村図書…表現や場面、登場人物の設定に着目して、内容を読み深める、②時代や社会の変化の中での、人と人との関わりについて考えをもつ
- ・学校図書…①他者と共有し得る未来への願いを考える、②人物や風景の変化に象徴された時代状況を捉える
- ・教育出版…①「私」の抱いた「希望」や社会の中での人間の生き方について考え、自分の意見をもつ、②場面や登場人物の設定のされ方、構成や展開に着目し、作品を批評する

以上より、魯迅の「故郷」指導において歴史や社会の中に生きる人間の関係や、時代状況を捉えさせることに関する記述がみられる。

また、このような指導観は以前から示されている。例えば、浜本・松崎（1987）では1985年時の「故郷」の単元名と指導のねらいを以下のように挙げている。

- ・東京書籍…「文学と人生」 主題をとらえて作者の考え方にふれ、人生のあり方を考える
- ・三省堂…「人間と社会」 社会の現実に立ち向かって生きた人々の姿を通して、人間と社会とのかわりについて考えを深めよう
- ・光村図書…「文学と人生」 社会や歴史の変動

Akane ENDO: Development of lesson dealing with literary teaching materials by adding viewpoint of media theory

- Lu Xun 'Guxiang' as a subject -

Graduate School of Education, Chiba University

の中に生きる人間のあり方について考える

- ・学校図書…「未来へ」 歴史の中に生きる人間のあり方について考える

- ・教育出版…「人間としての立場」 作中人物の人間像をとらえ、人間観を深める

これより、歴史や社会との登場人物の関係に焦点をあてたことを具体的な言葉で示しているものは5社のうち3社で確認できる。長年の間「故郷」の指導に関して、歴史的に困難な状況の中での人間関係を生徒に捉えさせる学習目標や指導のねらいが文言として存在していたといえよう。

## 1.2. 魯迅と『新青年』

『新青年』とは1915年に『青年雑誌』という名で上海にて創刊された啓蒙雑誌である。魯迅は1918年に「狂人日記」を『新青年』に発表した。その後にも、多数の論文や小説をこの『新青年』やその他の雑誌に執筆している。また、『新青年』の執筆者は北京の知識人や北京大学の教授を中心に構成された。彼らは、儒教による伝統的風習や家族制度などが人々に実行させられている当時の体制を批判した。<sup>4</sup>そして、「民主」と「科学」をスローガンに、儒教による封建的な専制主義体制の社会を改革することを求めた。

この『新青年』(旧『青年雑誌』)の編集長である陳独秀は、誌上での主張について、1919年の『新青年』第7巻第1号において以下のように述べる。<sup>5</sup>

われわれは、世界各国の政治、道徳、経済上の古い因襲観念は、進化の妨げとなり、情理に合わぬ部分が多いと確信する。社会の進化を追求するため、「天地の大義」で「古よりかくの如し」という先入観は打破せねばならず、古い観念からの脱却を決心すると同時に、古今賢哲とわれわれ自身の考えを集大成し、政治、道徳、経済上の新たな観念を創造し、新たな時代精神を樹立し、新たな社会環境に適応せねばならない。

(中略)われわれは、新たな時代、新たな社会生活が進歩するのに必要な文学、道徳を創造せねばならず、そのため因襲的な文学道徳で時代に適さぬものから脱却せざるを得ない。

本文は、12の内容を本誌での具体的主張として掲げており、先の引用では、特に儒教による伝統的な価値観に基づく社会からの脱却を主張していると思われるものを抜粋した。この中では、古い伝統的な価値観に基づく観念は、社会の進化を妨げることがあると指摘し、人々は新しい生活や環境に適するべきであることを主

張している。

また、旧儒教社会の中では、女性と男性の権利が異なっており、女性は本来家の中に居る存在であるとされ、外出や室外の人物との交流が許されない場面が多かった。

しかし、1919年の五・四運動では女子学生も参加したと言われ、「男女の別」<sup>6</sup>の思想などを含む儒教体制に対する反抗となり、『新青年』出版の時期は、改革の機運が高まる時期であったと思われる。

本稿で扱う「故郷」も『新青年』に掲載された作品である。1921年1月に執筆され、同年の5月に『新青年』に掲載されたという。このように、「故郷」には、儒教による古い慣習を打破しようと改革運動がなされる五・四時期<sup>7</sup>の中で執筆されたという背景が存在する。

## 1.3. 「故郷」の翻訳の違い

前述した通り、「故郷」は中国の魯迅によって書かれた小説であり、現行の教科書では竹内好の訳文が掲載されている。現在、「故郷」は様々な人物によって翻訳がなされており、作品の解釈が訳者ごとに大きく異なることもある。しかしながら、現行の教科書では竹内訳「故郷」のみが使用され、現場教師が他の訳を検討して授業を組み立てることは、現状としてはほとんどないだろう。

ここからは、竹内好訳、丸山昇訳、井上紅梅訳、中国語原文を比較し、教材解釈に影響を与えそうな表現を検討していく。竹内好訳には旧訳と新訳があるが、教科書で採用されている新訳を参考にした。

1点目に、中国語原文で「紫色的圓臉」となっている部分を取り上げる。これは、幼い時のレントウの姿を描写した部分である。日本語に直訳すると、「紫色の丸顔」であるが、竹内訳では「艶のいい丸顔」、丸山訳では「よく日に焼けた丸顔」、井上訳では「紫色の丸顔！」となっている。竹内訳、丸山訳は原文からはかなりかけ離れており、3者の訳からは全く違うレントウの姿が想像される。特に、竹内訳の「艶のいい丸顔」は、「私」との再会後のレントウの変貌した姿と対比されて発問されることが予測される部分である。

2点目に、中国語原文で「我和母亲也都有些惘然」となっている部分を取り上げる。竹内訳は「私も、私の母も、はっと胸をつかれた。」、丸山訳は「私も母もいくらかしゅんとした。」、井上訳は「わたしどもはうすら睡くなって来た。」と、3者とも明らかに意味の異なる訳を採用している。丁(2007)によると、「惘然」とは「何かを失った様子、がっかりしたさま、満足しないさま。」を表し、教科書掲載の「はっと胸をつかれた」は異なる意味で捉えられているという。さらに、丁(2007)はこの部分に関して、以下のように指摘する。

ちなみに、中国の国語教室では、「惘然」という単語は主題に関わる重要なキーワードとして扱われている。「心に何かを失った様子」とは、いったい何を失ったのか、これは教師からよく提示される質問である。

日本の教科書では、中国の「故郷」の授業で重要とされる部分を、原文とは大きく異なる訳で教えられていることがわかる。日本では魯迅の「故郷」として教える際に、教科書以外のテキストを採用することはほとんどない。これでは、作家の本来伝えようとしていた意図とかけ離れた解釈が一般化されるのではないだろうか。

#### 1.4. 「故郷」指導の問題点

「故郷」の授業実践における問題点をまとめると、①歴史的事項の理解のさせ方に関する問題、②再構成された文学であることへの理解が少ない、③身近な問題とかけ離れていることが挙げられると考える。

①に関しては、五・四期の中国の理解が中学生には難しいことが主な理由となる。「故郷」は歴史の変動のなかで成立した作品であり、テキスト読解の際に内容理解が曖昧なまま、授業が進んでしまうことがある。「故郷」の実践例を参照すると、指導者によっては、簡単に歴史的事項を生徒に教えることもあるが、この内容も指導者によって意図的に選択されたものとなる。国語の授業で資料を提示する場合、学習者中心授業の仮面をかぶった教師主導型授業となってしまう。

次に、②に関しては、文学作品全般に言えることでもあろう。教科書に掲載される際には、原文に手が加えられていることを生徒には伝えることは少ない。魯迅「故郷」の場合、訳者が複数存在する中で竹内好訳が採用されていること、「一九二一年一月。」の文面が削除されていることが、原文と比べた時に特徴的であろう。教科書の内容がそのまま魯迅の意図に即した作品ではないことへの理解をさせる場面があっても良いのではないだろうか。

そして、③に関して述べていく。これは①の歴史的認識が低い状態と関連する。このような状況の中、テキスト中心の指導で、生徒の実生活での経験に根差した価値観とテキスト内容との相互交流を重視すると、テキストの登場人物のやりとりで生じる情報しか読み取ることができず、その裏に存在する儒教によるイデオロギー支配を理解することができない。

そして、単なる「差別は良くない」といった浅い理解に留まる可能性がある。「故郷」という作品から「差別は良くない」というメッセージを読み取らせるだけでは、儒教の支配による階級差が生活に根付いている状況を理解させられていない。「故郷」の場合、社会制度とい

う外圧的な力で階級差や差別が生まれている部分もあるので、日本での個人の内面のありようによる人間関係上の差別と同等に扱われる問題ではないだろう。

また、「希望」に関する解釈も、テキストの文面のみによった解釈では問題を引き起こすだろう。故郷の中の「歩く人が多くなれば、それが道になるのだ」を好意的に捉える読解が多くなるが、これを自己の生活に置き換える授業はいささか強引なように思える。読者論の中では、作品の登場人物の行動と自己の経験とを相互交流させることで、自己に新たな価値観を芽生えさせることが期待される場面がある。しかしながら、「故郷」の作品の舞台と生徒の実生活はあまりにもかけ離れている。そのため、魯迅が伝統的な儒教イデオロギーを相手にした革命への意志を、日常生活に置き換えることは、生徒の解釈を教室のコード寄りに誘導しているように考える。あまりにも「希望」の水準がかけ離れているのだ。

さらに、儒教イデオロギーに立ち向かおうとする革命家の「私」に賛同する授業になってしまう場合、儒教に対する偏見を生じさせるのではないだろうか。たしかに、この時代、儒教による文化・風習が人々を圧迫していた事実はあるが、その点のみを取り上げてしまうと、長年かけて儒教が築き上げてきた文化や思想をおざなりにすることになる。近代に合わなかった思想であるからといって、安易に現代に置き換えて革命家「私」に同調させる授業にしては偏った思想を生み出すと考える。

以上が「故郷」の授業で生じる問題であるとまとめる。このような「故郷」の問題は、「故郷」というテキストへの理解が少ないことが原因だろう。現在では、様々な資料を参照できるのだから、教科書のテキストのみに縛られる必要はないと考える。むしろ、「故郷」の場合、この作品がどのような背景で成立したか、どのような意図をもって制作されたか、読者層はどのように変化したか、などを生徒に学ばせることで、理解が深くなる作品であると考えられる。

#### 1.5. メディア論の導入の可能性

これまで述べてきた「故郷」指導の問題点には、読解の際にテキストの内容のみを扱う点が要因となると考える。

魯迅「故郷」は五四時期の革命を訴える文脈で書かれた作品である。そのため、儒教による封建的社会的現状や、魯迅の立場、魯迅が「故郷」に込めた意図を理解しなければ、内容に迫った読解は難しくなるのではないだろうか。また、学校の文脈に合わせて単純に「差別はいけない」「世の中を変えるために立ち上がるべきだ」などと、深く検討もせずに道徳的な解釈を作り上げてしまう可能性がある。

さらに、魯迅「故郷」は訳者によってかなり解釈が異

なる作品であるし、竹内好訳では他の訳者と異なる訳を多数採用している。通常の国語の授業では、この点に触れることは考えにくい。このままでは、受講者の認知は竹内好訳を魯迅の「故郷」そのものだと認識してしまう危険性がある。魯迅「故郷」に深く迫るためには、多数の訳を読み比べ、「故郷」が翻訳文学、教科書とメディアを替えるたびに变化している構造をとっていることを理解しなければならないと考える。

以上の問題点の改善にメディア論の導入を提案する。国語科でのメディア・リテラシー教育について述べている人物にD.バッキンガムがいる。バッキンガム(2006)は、国語科にメディア・リテラシーを展開した場合何を学ぶことができるかについて、以下のように述べる。

国語の授業で学べることは以下の通りである。

- ・出版産業界の経済的仕組み、他のメディア産業との統合。
- ・潜在的な読者へ本を流通させたり、頒布したりする手段としての本の論評、広告、文学賞、書店、講読会などの果たす役割。
- ・特定の作家——生存している場合でも、死亡している場合でも——についての評判(「ブランド・アイデンティティ」)はメディアによってどのように創られ、維持されているか。
- ・活字テキストは時代や環境の変化につれて幅広いメディアで、また多様なオーディエンスへ向け、どのように作り変えられてきたか。
- ・さまざまなメディアの持つ相対的な可能性と限界。例えば登場人物、著者の見解、雰囲気、などの構成という観点から。
- ・活字メディアや他の形態のメディアのノンフィクション・テキストにおけるリプレゼンテーション、事実、意見。
- ・さまざまな社会的集団は活字テキストでどのように構成され表現されているか(されていないか)。また、そのことは著者の社会的地位とどのように関わっているか。
- ・本のジャケットや書店のディスプレイで使われるデザインや言語によって異なるオーディエンスがどのようにターゲットにされているか。
- ・さまざまなオーディエンス集団の読書習慣と、活字テキストや他の形態のメディア・テキストに対するオーディエンスの反応

バッキンガム(2006)は、1.Production(制作) 2.Language(言語) 3.Representation(表象) 4.Audiences(オーディエンス)を著書『メディア・リテラシー教育』にてメディア論の基本概念として示して

いる。以下に説明する。<sup>8</sup>

「制作」は「ほとんどのテキストは集団によって、多くは商業的利益のために制作され供給されている」ことを踏まえてメディアの特性を活用していく概念を示す。

「言語」は、「一般的に理解されているような見慣れた記号やきまり/約束事」のことである。例えば、テレビでの「話し言葉」「書き言葉」以外にも、「映像」や「音声」を用いるが、これらすべての要素が「言語」になる。

「表象」について、バッキンガムは「メディアは現実をそのまま提示しているのではなく、それを構成して再提示しているのである。」と述べており、どのような軸で再構成されているかが「表象」にあたる。

「オーディエンス」については、それを研究することについてバッキンガムは「オーディエンスがどのようにターゲットにされ測定されているか、またメディアがどのように流通し、分配されているかを考えることである」と述べている。オーディエンスを研究することで、メディアがどのように機能しているのかがわかるという。

このバッキンガムの4つの基本概念を文学教育に取り入れる実践の先行研究に、上松(2008)がある。上松は、この概念のうちオーディエンスを文学教育に取り入れる際に同一視分析、情動反応分析、自分史分析などの個人の経験による読みの違いを明かにする、学習者の経験を文学の読みと照らし合わせて結びつける方法を挙げている。ここでは、読者の読みはそれぞれ異なることを前提に、自分の読み方を発表し、他者の意見を聞き、意見を交流し、学び合うことが期待されるとしている。

しかし、今回の魯迅「故郷」のような階層的に編集をされ、教科書に掲載されており、なおかつ、歴史の文脈でつくられた作品については、上松の論では不足があると考えられる。「故郷」の内容に深く迫るためには、執筆された意図について迫らなくてはならない。「故郷」は当時の知識人向けに作られた口語体の作品である。この作品について、教科書会社が目標とする「社会と人間」に深く迫るためには、現代の読者のみならず、絞ってはならない。「故郷」が執筆された当時の読者にまで目を向けるべきだ。

## 2. 研究の目的・方法

### 2.1. 研究の目的

本研究の目的は、前述した魯迅「故郷」における問題点を改善するためにメディア論の観点を加えた授業の考案、実践、その考察を経て、授業の有効性と課題を顕在化していくことにある。

本研究におけるメディア論の観点を加えた授業とは、前述したバッキンガムの、1.Production(制作)

2.Language (言語) 3.Representation (表象)  
4.Audiences (オーディエンス) の要素を文学作品の作品理解の際に生徒に意識させていくような授業とする。

このような観点を授業に加えることによって、作品を1つのメディアとして生徒に理解させ、テキストの表層から読解をすすめていく従来の授業と差別化を図っていく。

そして、本研究の目的が達成されたかどうかは、従来の鲁迅「故郷」を扱った授業と比べて、具体的に以下の3点を中心に考察していきたい。これら3点は、授業実践時の学習目標として設定した部分である。

1点目は、翻訳の違いを授業で扱うことの有効性である。通常の翻訳文学を扱う国語の授業では、教科書の掲載されている訳者の訳のみを扱う。また、生徒が日常的に複数の訳に接することがないと予測する。そこで、複数の訳を扱うことで、生徒の意識は変わるのか、多面的に文学を読むことで気づきがあるかどうかを観察していく。

2点目は、作品にまつわる出版の背景や歴史的背景を知ることの有効性である。鲁迅「故郷」の読解を難解にする要素のうち、歴史的背景の理解が中学生には困難であることが挙げられる。鲁迅「故郷」の背景として関連してくる歴史的事項は、中学校の歴史の授業で扱う範囲からは逸脱している。本授業では、儒教や『新青年』に関連させた「故郷」執筆の歴史について取り上げていくが、生徒たちの様子や発問に対する回答はいかなるものになるのかを観察し、検討していく。

3点目は、作品の表現について考えることの有効性である。本授業では「故郷」をメッセージ性の強い小説作品として取り扱う。これに関連して、社会の構造に対する抜本的な改革を訴えるのに小説という形態を用いることの特質について生徒に考えさせる。この過程を通して、生徒たちが文学の在り方そのものについて考える契機としていきたい。小説という形態で何らかの主張を行うことの効果を考えさせる。

また、自分が鲁迅だったらどのようなメディアを使うかを考えさせ、メディアそのものの特性について考えさせていくことを目的とする。これらの発問に対する生徒の取り組み方やアンケートの結果から、生徒が表現の方法について意識が及んだかどうかを検討する。

## 2.2. 研究の方法

本研究の実践授業は、千葉大学教育学部附属中学校の中学校3年生2名(A,Bと表記)と、中高一貫校である実践校アの中1~高2の生徒8名(C,D,E,F,G,H,I,Jと表記)を対象に、2校で実施された。

本研究では千葉大学教育学部附属中学校の参加生徒2人の変化を中心に考察していく。手段として、授業の

様子や、授業中の発言、ワークシートの記述、事前アンケート、事後アンケートを参考に考察していく。

また、補足情報として、実践校アでの授業の結果も考察の要素に加えていく。

## 3. 授業のあらまし

### 3.1. 授業概要

この授業は国語科と社会科の横断的な授業としての立場をとる。「故郷」という作品に迫る点では国語科の要素があるものの、歴史的背景や翻訳の違いについて調べ、資料の検討をする場面では社会科での学習に近い。

1校目の実践校である千葉大学教育学部附属中学校では、選択社会科の時間に授業を実践した。国語科の学習教材を用いるものの、授業開発は社会科の授業構成を意識して作成することとした。

2校目の実践校である実践校アでは、放課後のクラブ活動の時間を用いたものの、担当教諭には国語科と社会科の横断的な授業である意図を伝え、社会科として授業を組み立てていることを説明し、了承を得た。

### 3.2. 学習内容

本授業では「故郷」という1つの作品をメディアとして捉えることを目標とする。そのために、前述したバッキンガムの、1.Production (制作) 2.Language (言語) 3.Representation (表象) 4.Audiences (オーディエンス) の要素を意識した。

具体的には、1.Production (制作) においては、「故郷」の翻訳の違いを知ることによって翻訳文学であることを認識させる取り組みや、「故郷」が出版された背景事情について知ることを重要視する。また、「故郷」を通して鲁迅が伝えたいことや、どのような人をターゲットとして制作したのかについても考えさせる。

2.Language (言語) に関しては、小説という表現方法を鲁迅が用いた理由について問う発問を加えた。また、一般にメディアを選ぶときにどのような言語を用いるかを考える場面として、自分が現代の鲁迅であったらどのようなメディアを選ぶかを考えさせる場面も加えた。

3.Representation (表象) に関しては、登場人物の関係性や各登場人物の役割について考えさせることを目的とした発問を組み入れた。

4.Audiences (オーディエンス) に関しては文学としての「故郷」の読み手を意識させることとした。上松(2005)では学習者をオーディエンスに定めているが、そうではなく、「故郷」の読者を学習者に限定せず、広義に考えた際の読み手の反応を想像させる場面を加えることとした。

### 3.3. 使用教材

本授業で使用した主要教材は以下のとおりである。

- ①魯迅「故郷」（竹内好訳、井上紅梅訳、丸山昇訳）
- ②ワークシート（授業を前編と後編に分けて 2 種類用意。実践校アでは後編のみ用いた。）
- ③中学校歴史教科書（東京書籍『新しい社会歴史』）
- ④世界史資料集（山川出版社『詳説世界史図録』）
- ⑤纏足靴（台湾・台北市の靴屋「小格格鞋坊」で購入）

### 3.4. 指導内容

本実践は 2 校で行ったが、実践の時間の確保や生徒の実態が実践校によって大きく異なるため、授業時数は実践校ごとに異なる。だが、どちらの学校においても後述する単元の指導計画のとおりにおすすめした。

【単元名】 様々な視点から「故郷」を読み解こう

【教材】 魯迅「故郷」

【単元目標】

- ・翻訳文学を階層的にとらえることができる
- ・「故郷」をメディア論の観点でとらえて議論ができる
- ・作品の歴史的背景や誰に向けた作品なのかを意識することができる

【単元の指導計画（全 3 時間）】

- 第一時 翻訳文学について知る
  - 第二時 誰に向けて書かれたのか、出版の背景を知る
  - 第三時 誰に向けて書かれたのか、出版の背景を知る、表現の方法について考える
- ※社会科の授業として実施するが、国語科と横断的な授業になるようにする

### 3.5. 学習指導案（略案）

以下に、本研究における学習指導案を示す。

表 1 学習指導案 1 時間目

時間(50分)	学習活動・発問
導入(10分)	○海外の小説で知っているものはありますか ○カフカ「変身」という作品を知っていますか？主人公は何に変身するのでしょうか。 ○なぜこのように翻訳が分かれるのでしょうか。
展開(35分)	○学習目標：翻訳文学に注目して読み比べる を確認 ○「故郷」の作者は誰でしょうか。訳者は誰でしょうか。 ○「故郷」の範読を聞き、感想や疑問点をまとめる

	○ルントウの子ども時代の様子を示す「艶のいい丸顔」、ヤンおぼさんの若いときの様子を示す「豆腐屋小町」からはどのような印象を受けますか ○中国語原文「紫色的圓臉」「我和母亲也都有些惘然」について、丸山昇、井上紅梅はどのように訳しているでしょうか ○他の訳者の訳からは、どのような印象を受けますか
まとめ (5分)	○授業のまとめ、次回予告を聞く

表 2 学習指導案 2 時間目

時間(50分)	学習活動・発問
導入(10分)	○前回の授業では「故郷」が翻訳文学であることをやりましたね。翻訳文学であることの特徴はありますか。
展開(35分)	○学習目標 作品が成立した背景や誰に向けて書かれたものなのかについて考える ○魯迅「故郷」はいつの作品でしょうか。 ○歴史の年表を見てみましょう。この時期の中国に関するできごとにはながありますか ○ヤンおぼさんはどんな人物でしょうか ○作中のヤンおぼさんはどうして「コンパス」のように見えるのですか ○どうして纏足をしたのでしょうか（誰に向けて書かれたか） ○魯迅の「故郷」は誰に向けて書かれたと思いますか ○儒教について知っていることはありますか ○授業に関係する儒教や『新青年』についての説明を聞く ○このような時代の動乱の中、ヤンおぼさん、ルントウ、「私」はどのような立場だったのでしょうか。
まとめ (5分)	○授業のまとめ、次回予告を聞く

表 3 学習指導案 3 時間目

時間(50分)	学習活動・発問
導入(10分)	○前回の授業の復習
展開(35分)	○学習目標 作品が成立した背景や誰に向けて書かれたものなのかについて考える ○「故郷」で「私」がルントウをみて偶像崇拝であると思ったのはなぜですか？

	<p>○私の「希望」とはなんですか。私の「希望」も手製の偶像であるのはなぜですか？</p> <p>○魯迅は「故郷」を知識人向けの雑誌に論文ではなくて小説で書きました。なぜ、このような表現の方法をとったのだと思いますか。</p> <p>○あなたが現代の魯迅になったとして、「故郷」のように世の中を変えていこうとする作品を現代で発表する場合、どのようなメディアを使いますか。誰に向けて伝えようと考えますか</p>
<p>まとめ (5分)</p>	<p>○授業のまとめ</p>

### 3.6. 事後アンケートの考察

授業後に事後アンケートを実施した。前半の授業と後半の授業、授業全体にわけて発問を設定した。質問項目は以下のとおりである。

翻訳の違いを扱った授業に関して、あてはまる数字には1つ○をつけてください。

(1) 翻訳の違いを扱った授業は面白かったですか？

①とても面白かった ②やや面白かった ③あまり面白くなかった ④面白くなかった

(2) 翻訳の違いを扱った授業は理解できましたか？

①よく理解できた ②やや理解できた ③あまり理解できなかった ④理解できなかった

(3) 翻訳の違いについて興味や関心が高まりましたか？

①とても高まった ②やや高まった ③あまり高まらなかった ④高まらなかった

(4) 教科書とは訳者が違う翻訳を読み比べて、作品から受ける印象が変わることはありましたか？

①とてもあった ②ややあった ③あまりなかった ④なかった

(5) 今後、翻訳された海外の作品を読むときには、翻訳された作品であることに注目しようと思えますか

①とてもそう思う ②ややそう思う ③あまり思わない ④思わない

(6) 色々な翻訳を読み比べてみてどうでしたか？

自由に感想を書いて下さい。

作品にまつわる文化や歴史的背景の授業について、当てはまる数字には1つ○をつけてください。

(1) 作品にまつわる文化や歴史的背景を扱った授業は面白かったですか？

①とても面白かった ②やや面白かった ③あまり面白くなかった ④面白くなかった

(2) 作品にまつわる文化や歴史的背景を扱った授業は理解できましたか？

①よく理解できた ②やや理解できた ③あまり理解できなかった ④理解できなかった

(3) 作品にまつわる文化や歴史的背景について興味や関心が高まりましたか？

①とても高まった ②やや高まった ③あまり高まらなかった ④高まらなかった

(4) 今回は中国の伝統的な思想である「儒教」を扱いましたが、儒教の考え方について触れることで作品の理解が深まる場面はありましたか

①とても深まった ②やや深まった ③あまり深まらなかった ④深まらなかった

(5) 今後、文学作品を読むときに、作品にまつわる文化や歴史的背景を考えてみようと思えますか

①とてもそう思う ②ややそう思う ③あまり思わない ④思わない

(6) 作品にまつわる文化や歴史的背景に踏み込む読み方をしてみてどうでしたか？自由に感想を書いて下さい。

授業全体について、当てはまる数字には1つ○をつけてください。

(1) 作者がどのようなねらいで作品を書いているか考えることはできましたか

①とてもできた ②ややできた ③あまりできなかった ④できなかった

(2) 作者がだれにむけて作品を書いているか考えることはできましたか

①とてもそう思う ②ややそう思う ③あまり思わない ④思わない

(3) 作者が小説という表現方法を使った効果について考えてみることはできましたか。

①とてもできた ②ややできた ③あまりできなかった ④できなかった

(4) 似ている内容でも伝える方法(例えば、小説、インターネット、テレビ、スピーチなど)を変えると、受け手の印象は変わりますか

①とてもそう思う ②ややそう思う ③あまり思わない ④思わない

(5) 一番興味をもてた内容はどれですか？

①翻訳について ②文化や歴史的背景について ③小説という表現について ④その他

(6) 最後に、全体を通して印象に残った場面や感想があれば自由に書いてください

以下、アンケートより抜粋して考察していく。

実践校アの生徒に関しては、2時間目の授業に出席していたC,D,H,I,Jにアンケートに協力してもらった。Gは途中退出したため、アンケートは実施していない。

アンケートの結果自体は、全体的に好意的な反応であったように考えられる。中でも、「(6) 色々な翻訳を読み比べてどうでしたか？自由に感想を書いてください。」という設問に対して、Jが「今、国語の授業で明治時代の文学についてやっていますが、「ポケット」などの面白い表現が出てきます。それも英語が伝わってきたのがまだ最近だったからかなと想像できました。」と述べていたことは大きな成果であると考えられる。鲁迅「故郷」を通して、別の作品での事例に一般化することができており、この授業を通して、文学作品を読む際に1つの視点を与えることができたと考えられる。以降はA,Bそれぞれのアンケートの結果を中心にみていく。A,Bは選択式の設問に対しては2人とも好意的な反応を示した。アンケートの自由記述の部分を抜粋して考察していく。

まずは、1回目の翻訳の違いを扱った授業に関する設問である「(6) 色々な翻訳を読み比べてどうでしたか？自由に感想を書いてください。」といった項目に着目していく。

Aは「人によって感じ方がちがうとはいえ、あまりにも翻訳がちがう部分があり、とても驚きました。」と記述している。Aは事前アンケートでは、同タイトルの本から1冊を選ぶときに着目するポイントは「値段」であると述べていた。また、1時間目の授業時にも、訳者が異なる文章について「変わらないと思う。」と発言していた。そのため、本授業を通して、これまでの翻訳文

学に対する捉え方が変わった部分があったと思われる。加えて、アンケートでの「一番興味を持てた内容はどれですか？」という項目で、Aは、「①翻訳について」と回答していたため、本授業で関心を持つことができた観点であるようにも考えられる。

Bは「色々な翻訳を読み比べる授業はしたことがなかったので、始めてやってみておもしろかったです。」と記述している。Bは翻訳の違いで登場人物の印象が変わるかを考察する場面では、他生徒と比較して深く考察をしていたように思えた。これまでに行ったことのない作業であるが、関心をもって取り組んでいるように考えられる。

次に作品にまつわる文化や歴史的背景の授業に関する設問である「(6) 作品にまつわる文化や歴史的背景に踏み込む読み方をしてみてどうでしたか？自由に感想を書いてください。」という項目に言及していく。

Aは「今までに読んだ本の中にも文化や歴史的背景が関わっている作品が多くあると思うと、楽しみ方が増えると思います。」と記述している。Aは事前アンケートで、読書に対しては「とても好き」、歴史の授業に関しては「好き」と答えており、抵抗なく授業に臨むことができたとも考えられる。

また、授業中の発言で特筆するのは、鲁迅がどのような人に向けて作品を作ったのかを聞いた場面にて、「まず作品が載っていたのが、この雑誌が色々新しいことをしていったら、この話の中でも主人公が色々気づかされているからそういうところから。現状維持しないで新しいことを取り入れたほうがいいのかなって。」と述べていた点である。Aは「考え方が古い人」に向けて作品を書いたと回答し、その理由を前述のように述べた。作品の出版の背景を踏まえた上での発言であった。

Bは「物語の背景に歴史がからんでいておもしろかったです。」と記述している。Bは纏足靴の模型を提示したとき、自分から定規を取り出し長さを測る様子が見られた。また、授業実施前は歴史の授業に関して「あまり好きではない」と答えていたが、授業後のアンケートでの「一番興味を持てた内容はどれですか？」という項目では、「②文化や歴史的背景について」と回答していた。歴史に対して比較的ネガティブな印象を持っている生徒であったが、抵抗なく取り組むことができた学習内容であったと考えたい。

最後に授業全体にまつわる質問項目である「(6) 最後に、全体を通して印象に残った場面や感想があれば自由に書いてください」に対する回答を考察していく。Aは「小説を通して人々に思想について伝えるのが面白いと思いました。教科書やその他の資料を見てみると、歴史と関わっていることもよくわかりました。いろいろな視点で読むことができたと感じました。」述べており、



Bは「今まで翻訳の違いや背景にある文化についても考えたことはなかったのでとてもおもしろかったです。」と述べている。それぞれ、授業で一番興味を持つことができたと回答した内容に言及していることが特徴的であった。

## 4. 考察

### 4.1. 研究の成果と課題

本節では、研究の成果と課題について考察していく。すでに研究の目的として示した要素を考察の観点としながら言及していく。本研究では、魯迅「故郷」の授業を構成する際に、メディア論の観点を加えた授業づくりを行った。本節では、翻訳の違い、出版や歴史的背景を知ることの有効性、作品の表現について考えることの有効性について考察していく。

1点目は、翻訳の違いを授業で扱うことの有効性である。この授業内容に関しては概ね有効であったと考える。アンケートの中でも、翻訳の読み比べについて初めて行った旨を記載した生徒が多く、これまでに経験のない作業であったことが予測される。そして、授業内の様子や、ワークシートの記述より、全員が様々な訳を読み比べることで、訳者によって翻訳の内容が異なることを理解できている様子であった。多くの生徒が、翻訳文学は、原作者、訳者を経て読者に届いていることを知ることができたと考えられる。

ただ、今回は授業時間の都合があり、授業者の方で明らかに訳の違いが出る範囲を指定することになった。そのため、生徒自身が独自に探求する場面は、見つけ出した訳からそれぞれの印象を考える発問に留まってしまったことが問題点であるようにも考えられる。時間をもっと割いていれば、実践校アの1時間目の授業において、Fが授業者の指定した範囲外で、ルントウの口調の印象の違いについて発見したような生徒独自の発見を促す場面を増やすことができたと考えられる。

2点目は、作品にまつわる出版の背景や歴史的背景を知ることの有効性についてである。これに関しては本実践では課題はあるが有効であると考えられる。

まず、ヤンおばさんの纏足をきっかけとして中国の儒教制度が存在することを説明し、その体制に反対する人たちが『新青年』に執筆していたことと、「故郷」もそれらの作品に属するというを生徒たちに理解させる授業内容自体には問題はなかったように思える。授業中の発言やワークシートの記述でも、儒教を古い思想であると捉えて批判的な立場である魯迅によって執筆された小説であることを念頭に置いて、発問に向き合う場面が多く見られた。

ただ、授業時間の都合があり、授業者の説明に頼る部

分が多かったことは改善すべき点である。今回は、儒教の簡単な説明や、『新青年』の雑誌の目的について授業者がスライドを用いて示すこととなった。これにより、やや教師主導で恣意的な内容選択となってしまったように考えられる。実際の教育現場でこの授業を行う場合には、儒教の風習について自由に調べて発表する場面を作ることや、『新青年』の和訳版に触れさせて気づきを与える場面を作ることなどで、生徒自身が主体となって「故郷」の歴史的背景に積極的に触れることができる授業展開にできると考える。

3点目は、作品の表現について考えることの有効性について言及する。これに関しては、概ね問題がなかったように考える。小説という表現方法を用いることの効果を考えた上で、「現代の魯迅だったらどのようなメディアを使うか」という課題に向き合うことができていたと思われる。特に、魯迅が小説を用いたことに関しては、責められた時に言い逃れができる、堅苦しい文章よりは多くの人に読んでもらえる、後の世代にも読んでもらえるなどといった様々な意見が出ており、生徒によって回答の幅が広いことが特徴的であった。

しかしながら、全体のアンケートでは、授業の中で一番興味を持つことができた内容として「③小説という表現について」を選んだ生徒は1人しかいなかった。他の要素と比べて、印象に残りにくい授業展開となってしまった。時間が許せば、生徒に意見を発表させるだけにとどまるのではなく、意見交流をさせる場面を作ることができたら学習効果が高まったようにも考えられる。

以上を踏まえて、「故郷」の読解の問題点についてはメディア論の観点を加えることで、概ね解消できる見込みがあるように考えられるが、授業展開に課題が残るように考察する。改善すべき点があるものの、「故郷」の授業の在り方について新しい見解を示すことができた点では、文学教育の研究において寄与できたと考えられる。

### 4.2. 今後の展望

「4.1. 研究の成果と課題」を受けて今後の展望について考えていく。

本実践では、「故郷」を1つのメディア作品として捉えるという目的は概ね達成できたように考える。しかしながら、授業展開にはいくつか課題が残る結果となった。

また、今回は少人数での実施であったため、実際の40人程度の教室を想定した授業展開に構想しなす必要がある部分も存在する。さらに、今回の実践では読書や歴史の学習に対してそれほど抵抗のない生徒が大半であったが、実際の教育現場では抵抗意識をもつ生徒も存在するはずだ。このような生徒に対して、モチベーション向上のためにいかなるアプローチをしていくかというも改善案として求められる要素であろう。

以上が、本研究を踏まえた今後の展望として期待される事項である。本研究が、文学を扱う授業の研究に貢献できることを期待したい。

- 
- <sup>1</sup> 本稿は、同名の平成 29 年度千葉大学大学院教育学研究科修士論文を再構成したものである。
- <sup>2</sup> 本論文では、竹内好訳、丸山昇訳、井上紅梅訳の『故郷』を検討するが、主人公に関して竹内・丸山は「私」、井上は「わたし」と表記している。本稿では、井上の訳を抜き出す場合以外は「私」で表記することにする。
- <sup>3</sup> 例えば、竹内好 (1981) 「日本における魯迅の翻訳」竹内好全集第 3 巻、pp.367-373 では、竹内好により、12 例の翻訳の例が紹介されている。ここでは、訳者不明の訳も 1 例含まれているため、「11 人以上」と表記した。
- <sup>4</sup> 「呉虞の「儒家は孝悌の二字をもって二千年来の専制政治と家族政治を結ぶ根幹とし、それを揺るぎないものとした」(「家族制度は専制制度の根拠である」1917 年 2 月)に代表される。家長への服従という孝悌を説き個人の尊厳と独立を失わせている家族制度とそれを結びつけた儒教倫理を厳しく批判した。」(湯浅邦弘編著 (2010) 『概説中国思想史』、ミネルヴァ書房、p.203.)
- <sup>5</sup> 長堀祐造・小川利康・小野寺史郎・竹元規人(2016) 『陳独秀文集 1:初思想・文化言論集』東洋文庫、pp.183-186 より引用。原文は、『新青年』第 7 巻第 1 号、1919 年 12 月 1 日、「本誌宣言」、無署名、題名は『文存』による。
- <sup>6</sup> 礼記内則篇においては儒教における理想的な夫婦関係として男女の区別をはっきりすることが定められ、男女が妄りに交際しないようにされた。生活の上でも、家のつくりが内と外に二分化され、女性は部屋の内に、男性は部屋の外を居場所とすることが理想とされるなどされた。(任夢溪 (2015) 『礼記』における女性観—儒教的女子教育の起点—、東アジア文化研究科院生論集、関西大学大学院東アジア文化研究科、第 4 号、pp.99-111.)
- <sup>7</sup> 五・四運動のうねりは二〇年代半ばの国民革命へと連なる。中国の近代文学は文学革命を契機とし、この五・四運動前後に急成長しているため、文学史では一〇年代半ばから二〇年代半ばまでの時期を五・四時期と称する(藤井省三(2002) 『魯迅辞典』、三省堂、p.28) に倣った。
- <sup>8</sup> D.バッキンガム著、鈴木みどり訳(2006) 『メディア・リテラシー教育：学びと現代文化』世界思想社、pp.71,73,75,77 を参考にした。

#### 引用・参考文献

- D.バッキンガム著、鈴木みどり訳(2006) 『メディア・リテラシー教育：学びと現代文化』世界思想社、pp.71,73,75,77,120-121。
- 上松恵理子(2008) 「メディア論の観点で文学を読むことの提案：新しい文学教育の概念を用いて」、人文科教育研究、人文科教育学会、35 号、pp.29-41。
- 竹内好 (1981) 「日本における魯迅の翻訳」竹内好全集第 3 巻、pp.367-373。
- 丁秋娜(2007) 「魯迅「故郷」の教材研究：翻訳文学という側面から考える」『全国大学国語教育学会発表要旨集』全国大学国語教育学会、113 巻、pp.243-246。
- 長堀祐造・小川利康・小野寺史郎・竹元規人(2016) 『陳独秀文集 1:初思想・文化言論集』東洋文庫、pp.183-186 より引用。原文は、『新青年』第 7 巻第 1 号、1919 年 12 月 1 日、「本誌宣言」、無署名、題名は『文存』による。
- 任夢溪 (2015) 『礼記』における女性観—儒教的女子教育の起点—、東アジア文化研究科院生論集、関西大学大学院東アジア文化研究科、第 4 号、pp.99-111。
- 浜本純逸・松崎正治編 (1987) 『作品例文学教育実践史事典・第 2 集：中学校・高等学校編』明治図書、p.103。
- 藤井省三(2002) 『魯迅辞典』、三省堂、p.28

---

湯浅邦弘編著 (2010) 『概説中国思想史』、ミネルヴァ書房、p.203。

#### 謝辞

本研究にご協力いただきました千葉大学教育学部附属中学校・実践校アの生徒の皆様、教職員の皆様のおかげで、本研究を進めることができました。この場をお借りして感謝申し上げます。